

静岡

富士山が、わが国17件目の世界遺産（文化遺産としては13件目）として登録が決定した。正式名称は、「富士山-信仰の対象と芸術の源泉」。

決定当日、富士宮市役所ロビーには、歴史的瞬間を祝おうと集まった市民が世界遺産委員会の生中継の様子を大型スクリーンで見守り、登録が決定した瞬間、大きな歓声が沸き起こった。現在、静岡県内には9の構成資産（単独8、山梨県にまたがるもの1）があり、既に三保松原などに多くの観光客が訪れている。

過去の世界遺産登録地を見ても、知名度が高まり、国内はもとより海外から多くの観光客が集まっている。富士山も例外ではなく観光客数の増加は間違いない。既に大手旅行会社が販売している富士山をテーマにした旅行商品は、昨年の実績を大きく上回る予約となり、新たな新商品も投入されている。さらに、行政や民間なども多くの催しものを企画・展開している。

世界文化遺産登録直後というホットな時期にある今だからこそ、少し冷静な目でこれからの富士山を考えることも必要ではないだろうか。そもそも世界遺産登録の目的は、環境保全を加速させて開発を抑止するところにある。日本の宝が世界の宝になった以上、国際基準の規制や保全管理の導入は不可欠。

特に最優先すべき課題は、登山客に係る対策であろう。7月1日の山開き以降、昨年よりも多くの登山客が訪れている。登山者数は昨年でも30万人を超え、今シーズンは40万人超とも言われている。富士山で見ると来光は爽快なものであるが、登山者が数珠つなぎになる光景はやはり異常と言わざるを得ない。具体的には、登山者への安全確保をどうするのか、環境保全をどう担保していくかにつきる。静岡県、山梨県両県は今夏から試験的に1000円の入山料徴取（任意）を開始する。しかし、1000円の入山料だけで登山者抑制は不可能であり、別に何らかの形で登山者の人数制限を行わない限り難しいであろう。一方で、眺めるだけでも感動を与えてくれるのが富士山の長長であり、登山以外の楽しみ方をアピールしていくことも重要であろう。世界遺産の構成資産の多くは五合目以下にあり、「世界遺産センター」や市民ガイドの活用により富士山の魅力を伝える仕組みも必要である。

これらの試みは、結果的に環境保全につながる。静岡県は、富士山周辺を魅力ある地域にしていくために「富士山周辺景観形成保全行動計画」を策定した。そこでは富士山への眺望景観を阻害するものを排除し、魅力的な景観を育み、そして眺望景観を魅力的にすることを重要な柱としている。富士山を活かした風景の優れた地域の形成も重要である。

ユネスコは2016年までに来訪者対策などを盛り込んだ報告書の提出を求めている。世界遺産登録はゴールではなく、世界の宝である美しい富士山を後世にまで残すスタートである。世界遺産をもつ誇りを胸に、何ができるのかを一人ひとりが考えて行かなければならないであろう。

静岡…富士山 「世界文化遺産」登録



富士宮市：富士山世界文化遺産登録決定セレモニー